

桑原武夫集

6

1959

1

1964

桑原武夫集

6

1959

）

1964

岩波書店刊行

桑原武夫集 6

第六回配本(全十卷)

一九八〇年九月一八日 発行

定価四〇〇〇円

著者 桑原武夫*

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三十一六五四二一
振替 東京六二六二四〇

印刷・三陽社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたしません

© 桑原武夫 1980

凡 例

一、この集は、桑原武夫の作品の中から、代表的ないし主要的と思われるものを、著者が自選し、これを年代順に配列し、十巻にまとめたものである。

一、配列は、ジャンルの如何を問わず、すべて発表年代順によつた。ただし、編集の都合上、厳密に順序に従えなかつた場合も稀れにある。

一、初出の場所と年月は各作品の末尾にしるした。

一、挿入写真のうち、桑原撮影のものには*印を付した。

一、テキストは原則として最近のものをを用いた。また、今回若干の訂正を加えたものもある。以後これを定本とする。

一、反訳、対談、座談は収めないが、調べのつく限り、全著作目録には記載した。

一、第十巻には、全著作目録、年譜、索引を入れる。

目次

凡例

一九五	研究者と実践者	2
	日本の教育者	15
	叱るということ	44
	ケンソン	49
	眠り上手	54
一九六	一九六〇年論壇時評	62
	日本は小国ではない	129
	ひとはいさ	133
	宇宙時代と古典	136

訪米雑感	143
人を知る明のない先輩	163
伊勢神宮の国有化	168
私のノンフィクション	171
ジャワの十日間	175
安保阻止運動	195
青年の冒険精神	199
永井荷風	203
シュローホフ『静かなドン』	224
中野重治をめぐる雑談	240
ナシヨナリズム論について	246
日本文化の考え方	265
日本文化雑感	282

目 次

仲間的結合	289
存在としてのインド	293
大正五十年	298
インド史学界の新巨星	324
ローマ字新聞	351
シンポジウムに招かれての感想	355
緑のしげみ	359
柳田さんの一面	362
ルソー思想の世界への浸透	369
パワー・ポリティックス	384
アフ리카ひとのぞき	389
松本清張の文学	436
インド・ネパールの旅	448

一六三

目 次

	現在も生きる心情	523
一六四	狩野先生逸事	528
	後進国問題の考え方	530
	お や じ	553
	ベンガルの槍騎兵	562
	錬金術師の早技	566
	自 跋	579
	挿絵目録	601

1959



教研集会の仲間

研究者と実践者

ある小学校で、六年級の生徒が当用漢字をどれだけ覚えてるか、を調査した結果をみたら、「研究」という二字が読む方でも書く方でも第一位をしめていた。数年前、京都大学の学生がアルバイトとして、京大入学志望者に受験勉強をさせる「親学会」という組織をつくり、一時大いに盛大であった。この会が受験生にたいして色々の調査を試みた。その一つに、首尾よく京大に入学できたら何をしたいかとして、スポーツ・学習・研究・学生運動などをあげ、そのいずれかにマルをつけさせた。その集計で他を圧して最大多数だったのも「研究」であった。

子供や青年が研究というコトバにつよい関心を持ち、これにあこがれることは喜ぶべきだろうが、同時に、日本人が研究ということをはなはだ安易ないし気楽に考えているあぶなさが、そこに現われているように思われる。大学生も卒業論文を書き、それはささやかながら研究である。しかし大学へ入るなり研究したいなどというのは全く笑わせる。まず学習というべきであつて、これをぬかして研究をと考えたがるようなセツカチさが日本社会全体にあるが、学生はまず信頼する教授の特定の理論ないし方法論から学びとり、その下でトレーニングを受けたい、という気持をあまりも

たない。研究は自分一人のできるように思いこんでいるらしい。それなら、なぜ大学へくるのか。そうしたまちがった考え方もたせるのは、教授の方にももちろん責任がある（こう書きながら私自身うしろめたい気持を禁じえない）。

日本で研究者といえば、大学の先生と国立・大学付置・民間の研究soのそ々ということになる。高校や中、小学の先生はまず教育者であつて、研究者となることはきわめてむづかしい。在野で個人として研究している人もないではないが、そしてその数がふえることは望ましいが、日本の一般生活水準から考えて、冷静にみてふえる見込みはとほしい。筆者自身が大学の研究所にいたのだから、ひどく特權のない方のように聞えるかもしれないが、私は研究と勉強とを一おう區別して考えている。芭蕉を十年研究しています、などという篤志家に時おり出会うことがあり、その熱心さは道徳的には敬意をはらわねばならぬが、芭蕉の作品が大好きで、それを何べんも読みかえして嘆賞し、また芭蕉關係の研究書は片っぱしから集めて読破しているというだけでは、勉強家に相違ないが、研究者とはいえない。芭蕉の代りにドイツ政治思想史としても同じである。研究者とは理論をもち、少なくとも理論追求的であり、一定の方法をもつて対象を究明して、学界に新しい寄与をするような学的生産をなしうる人を意味するのである。芭蕉を研究するためには、その全作品や参考文献を熟読する必要があり、ドイツ政治思想史を研究するためにはドイツ語がよく読めることが必要なことはいうまでもない。研究の前に基礎的準備の勉強の不可欠なことは当り前だが、それは

あくまで勉強であって研究ではない。「勉強」はいいことだが、いいことだからいい言葉で「研究」といつてもよからうというのはおかしい。日本人は若干のコトバへの執着がむやみに強くて、「大学」というコトバと同じく、「研究」というコトバが大好きなのである。さきの芭蕉をやっているような人が研究費助成を申請したりするのを、研究でないからと断ったりするとひどくうらまれるのである。

研究所にもこのまぎれで研究者として不適格な人もたまにはあるが、研究所員はタテマエとして研究者でなければならぬはずである。しかし大学の教授はすべて研究者というわけではない。大学は教育と研究を行なうというのがタテマエだが、教育だけに専心する人があってもよく、またそれは尊い仕事である。アメリカには *teaching professor* (教える教授) と *research professor* (研究教授) との別があるが、前者になりたがる教授の方が多いときいている。前者なら、もちろん教える方の工夫、その技術が不可欠であり、またよく教えるためにはつねに勉強を怠ってはなるまいが、学界への寄与という責任がなく気楽なのである。ところが後者だと、新しい研究成果によって学界の批判にさらされなければならぬので、責任が重いから、なりたがらない。

ところで日本で、もし全国の大学教授にアンケートを出して、あなたは、この二つのどちらであるか、あるいはどちらでありたいか、ときいたら、大部分の教授は「研究教授」と答えるにちがいない。アメリカ人よりも日本人の方が一般に勉強すぎで勤勉好みだということの現われでもあろう

が、一方では、研究ということを勉強ないし読書生活と混同しているからである。

むかし私がパリにいたとき、哲学の国際大会があり、日本代表として東大の桑木巖翼博士がみえた。私の父の同僚でもあられた関係もあって、打ちとけて色々話をして下さったが、「大学の哲学の先生というものは、哲学史上の諸学派のことを教えればよいので、西田幾多郎君のように、自分のあみ出した哲学だけをおしつけるのは賛成できないね」という意味のことをいわれた。そして翌日の博士の発表は正直のところ独創性のとぼしい、つまらぬものであった（東大が日本最高の学府だということは外国人にも常識だから、あの人が日本一の哲学者か、とあとで聞かれて返答に困った）。私はそのとき博士のさきの言葉に大いに疑問をもったが、今にして思えば、恐らく桑木さんは最高級のティーチング・プロフェッサーであったのであろう。博士を国際学会の代表として送ったのは失敗であり、戦後アメリカの学者たちを前にして、ある東大の哲学教授が現代日本の三大哲学者として、桑木、西田、田辺、三博士の名をあげたというのは笑わせるが、大学としてはああいう博識で独創性をふりかざさぬティーチング・プロフェッサーも必要なのである。尊重しなければならぬ。しかし、日本の学問を進歩させ、また次代の研究者を養成、指導するためには、みずからすぐれた研究業績をあげてゆく教授が不可欠なことはいうまでもない。

私はここで大学論を展開するつもりではない。ただ、研究と実践との関係について感想をのべようとするにあたって、研究者という概念を少しはつきりさせておきたかったのである。金もうけの

方法を研究していた人が金もうけの実践にとりかかって成功した、というような場合ははずして、研究を専門の職業とする人々のことを中心にして考えたい。

「知行合一」という言葉がある。王陽明の言葉で、彼はそれを履行した偉人であった。知と行とはすべからく一なるべし、とは道德的には正しい要請である。禁酒運動をする人々が、その集会で一ぱいのは困る。非難されても仕方がない。しかし、この言葉は近代科学者にたいしては素朴すぎるだろう。科学が宗教の支配から独立し(西洋)、またはもっぱら人生哲学としての学問のほか新しい科学がつけ加えられ(東洋)、その科学が分化し、一おう全般的な善をはなれて個々の真を追求することになると、「知行合一」という命題は簡単に適用しにくくなる。もつともルソー、トルストイのように、人間社会が素朴さを失ったことを不幸とし、近代科学を認めまいとする立場もあるが、その当のルソーが非難されたのは、捨子事件そのほかまさに彼の知行不合一という点においてであったことをみても、近代は王陽明的生活態度をきわめて困難にしていることがわかる。マルクス主義はつねに理論と実践の統一ということをいい、それがたしかに魅力の一つであり、その聖者としてレーニンや毛沢東をもつことは強みだが、これをもって革命的条件のとほしい資本主義国のマルクス主義にたつ研究者を律するわけにはゆかないだろう。

しばらく道德の立場をはなれて、実践ということが研究者にとって研究上どういうプラス・マイナスがあるかを考えてみよう。ここでまた実践とは何か、が問題になるだろうが、定義に深入りし

ているひまがない。ただ科学的実践ということがあり、毛沢東もそれを実践のうちに数えていたと思うが、それは研究者として当然の義務だから、これは問題外とする。そこで実践ということをおう研究室の外での諸活動ということにおいて先に進もう。

数学を頂点とする非経験的な科学の研究者にとっては、そうした実践をすることが、研究上のプラスとなることはないであろう。数学は人生の経験が必要とせず、むしろその乏しいときの方が独創的研究が生まれる。エヴァリスト・ガロワのように、独創的数学者は大い二十歳代で立派な仕事をしている。ガロワは猛烈な革命的实践をやったが、それが彼の研究を進めたとはいえない（もっとも、その実践による心理的興奮が頭脳の機能によきシゲキをあたえたという生理的效果はあったのかもしれない）。素粒子論グループの学者が警職法改悪反対のデモに出たことは、社会人として道徳的に立派だが、それが彼らの理論追求にプラスしたか否かは疑問である。その他の経験科学においても、それが科学たるかぎり理論追求であることは当然であり、理論は理論たるかぎり、現実を基盤としつつも抽象性を持ち、現実バナレとなることは不可避であり、またそれでよいのである。したがって（この「したがって」には飛躍があるが）、理論家としての研究者も現実から何ほどかの距離をたもち、非実践者となることは避けられない。これを知行合一でないと、みずから恥じる必要もなく、他から非難するにもあたらない。近代社会には学問の専従者があってよいのである。

しかし同時に、研究者が研究室にこもる前に、または研究者でありつつ、行なうところの実践の学問上の価値を考えてみなければならぬ。私の結論をさきにいえば、その価値をもっと重視する必要がある、と信じる。抽象科学はいざしらず、経験科学とくに社会に関する科学における理論は、現実の人生、社会に対応し、しかも一おうの距離を保つことによつて、これを正確に見とおし、これの指標となるべきものである以上、それを作り出す人は現実の人生、社会での実践経験をもたねばならないはずである。それは訴訟法を研究するためには裁判官をやった経験が、また文学理論を考えるためには実作の経験が不可欠ということではない。若干の、しかし切実な経験をもち、つねにこれを分析し、相互間に連絡をつけ、またこれを核として思想的におしのばし、さらに本や他人から教わる経験の検証にも用いることが必要だというのである。経験主義という言葉は日本ではけなす意味に使用されることが多いが、経験相互間をつなぐということは、何らかの理論あるいは理論がなければ不可能なのである。そうした経験の網づくりが、すなわち新理論を編み出すことだとはいわない。それは困難な仕事である。しかし、そういう網をもっている人は、他人の本に書いてある理論を、そのまま丸のみのけらいうけることが不可能になる、という消極的な効果は必ずあるのである。

日本の社会科学の研究者には、そういう意味での実践経験がとぼしすぎるように私には思えてならない。ラスキ、カー、レーニン、ケインズといった人々の理論は日本の学界で大いにもてはやさ

れているが、そうした人々はみな実践の経験をもっていることに注目し、自分たちはこれでよいのか、という反省をする人が少なすぎる。法学部や経済学部を卒業して、その学科の成績がかなり良かったし、本をよむことも好きだというのが、そのまま修士になり、博士になり、講師、助教授、教授となつて、勉強さえしておれば理論が出てくるとは考えられない。他人の、主として外国の理論ないしはその発展の歴史を整理して教える人も必要だということはさきにもいったが、みずから理論家となる人がなくてはならない。

理論を編み出すためには、先人の理論を知ること、または特定の理論をもつ人に師事する段階はもちろん必要だが、理論家というのは他人の説をそのままもらっている人のことではない。ところが、諸理論の理解蒐集者と理論家とは日本ではよく混同されている。私は戦後、外国の学者と日本の学者との討論会ないし座談会のようなものに、何べんも出たが、日本の学者で「○○氏のこれこれの本を、または説を、どう思いますか」というような質問をする人が毎度あるのにはガツカリする。○○氏について自分の明確な意見でもあつてのことかと思えば、ただ相手の答えをきくだけで満足している。つまり、外国人の理論についての別の外国人の理論の蒐集が一つふえることを学問的進歩と思つていろいろらしいのである。学問のファンと学問の選手とは区別すべきで、ファンがなければ発展はなかるうが、代表選手としてファンを出しては困るのである。私は学問研究を競技としよにしているわけではないが、外国の知名の学者がくると、ご高話拜聴という形になるのはもう